相談支援つうしん

県立湘南養護学校
支援連携部　相談支援係
令和５年度２月３日第８号

「節分」を境に暦の上では春ですね。そうは言っても、冷たい風・曇り空では「今日も元気だ！よーし、やるぞ!!」とは中々いきませんね。

「チコちゃんに・・・」という TV 番組でも言っていましたが、人間の祖先は、晴れた日に狩りや食物を採取して、悪天候の時はケガや病気にならないように休憩モードになって生存率を上げようとしていました。その遺伝情報は今も私たちに残っているので、天気が悪い日は元気が出にくいようです。まあ仕方ないので、「自分が幸せ!!いい気持ち!!」となるようなことを朝仕掛けてみてもいいかもしれません。娘が小さいころは、大好きなイチゴを口に入れて朝起こしていたことを思い出します。息子には、大好きアンパンマンの曲かけて夫がお腹をくすぐって起こしていましたね（笑）。暖かい部屋と朝日も忘れずに…。

「研修会に参加して気づいたこと　Part３」

今回は、第 4 回日本ダウン症学会学術集会シンポジウム　With コロナ時代の ICT 活用についてです。

《**テーマ**》「家庭におけるタブレットを用いた学習・コミュニケーション支援」

角田　夏江（前橋協立病院小児科　臨床心理士）氏の情報をお伝えさせていただきます。

このケースは 20 代の男性の方です。特別支援学校を卒業して福祉事業所に通うがしばらくしてから家庭、事業所、病院の活動場面でも声を出さなくなり、うなずくことや「Yes　No」での反応が多くなったそうです。そこで、病院受診をして現状や原因を考えていくことになりました（聴覚の問題はありませんでした）。

福祉事業所では音声でのやり取りをしていました。本人としては、発音の不明瞭さから一度の発語で通じないと相手にうまく聞き取ってもらえないことを「つらい」と感じていたようで、何回も聞き返されると話したくなくなることが増えました。このように話すことを諦めてしまった時期に、福祉事業所での着替えや昼食も非常にスローテンポになっていきました。また、首振りや感覚を満たすような行動も増えました。

本人は、元々ゲーム機を操作できる力があり、ひらがな・カタカナの読み書きもできたので、23 歳から iPad を使い「えこみゅ」というアプリで絵カードを選択して文章を作る活動を始めました。この活動を通して「文字が音声を保つ」と角田さんは考え、さらに「かなトーク」を使用し作文を書くことにしました。また、家族に本人の好きな物（例：ウルト〇マン）を写真に撮ってもらい、病院の支援の場では、その映像を見ながら色んなことを思い出し、文字入力をしていきました。「かなトーク」の発音ボタンを押すと、きれいな発音が聞こえるので、その時本人はとても嬉しそうな顔をするそうです。

本人にとっては「はっきりと話したい。ちゃんと伝わるように話したい」という強い思いがあると話されていました。ご本人は、野球観戦が好きで、角田さんが 12 球団のチームを紙に書いてあげると、「かなトーク」を使って好きな順に野球チームを並べて記入したそうです。本人がどのチームが 1 番好きなのかは、家族も知らなくて驚かれたそうです。また、単語は書けるが長文は難しい本人に対して、角田さんが写真に合わせて文を書いてあげると、その文を小さな声で事前に読み上げながら入力するようになったそうです。

現在は「絵カードコミュニケーションシステム」のアプリを活用して、家にある本人の好きな物を写真に撮ってそれに文字を付けています。例えば「マグロ丼」の写真を撮り、その写真に「まぐろどん」と記入し文字化されることで本人の理解が進みました。家族から「夕ご飯何食べますか?」と聞かれて「まぐろどん」と答えることができるなど、身の回り品が文字化されることで主体的な意思確認が進んだそうです。

角田さんは、本人にとって好きなことを写真に撮り、それを ICT を使って文字化・言語化を拡大すること

ができると思うと言っています。タブレットを使って簡単に取り組める学習アプリを利用して、本人の気持ちを代弁することは大切なのではないかと話されています。

最後に角田さんが紹介しているアプリを少し載せます。学校にも色々なアプリがあるのでご相談ください。

アイコン等							
名前	えこみゅ	かなトーク	絵カード コミュニケーション	どうぶつ うまるカード	ひらがなを おぼえよう	たのしい ひらがな	やることカード
用途	絵カードでやり取り	文字入力で音声出力	絵カードでのやり取り	見本合わせ	読み	書き	スケジュール・タスク
	コミュニケーション　アプリ			文字の基礎			スケジュール

【ちょっと休憩】　　私の家族…その 11　「母　着物を着る!!」

以前、我が家の娘の結婚式の話を書きました。その時は、開催場所が沖縄だったので「かりゆし」という伝統衣装をみんなで着ることになったので、母も渋々和装はあきらめたというお話を書きました。しかし、今回「着物が着たい」という母の強い思いが、とうとう叶うことになりました。

そのきっかけは、正月明け（ひと月前）に我が家の長男も披露宴をすることになったことでした。

そのことを母と妹に報告すると、当然「今回は必ず着物を着る。今度は絶対色留袖を着る」と張り切る母。私たち姉妹は、母が着物を着ることは「母が死ぬ前にやっておきたいことのひとつ」として捉えていました(笑)。「もう、腹をくくるしかない」と、私たち姉妹も覚悟を決めました（そんな大ごと⁉)。

着物の準備は整いましたが、着付けをどうするかが問題です。病気になる前の母は、他の方にも着付けもしていたので「着付けを頼む必要はない！」と反対しました。でも「**素敵に**着付けることは、私たちにはできないよ」と話すと渋々納得し、できないことは他人にお願いすることになりました（自分も家族も頑張り過ぎないことは大切ですね)。

さて、披露宴当日は妹夫婦の車で会場に向かいました。銀座通りをぬけると「三越があるわね」とうれしそうに車窓を眺める母。式場ではヘアーセットを済ませ、いざ着付け。以前に比べ体重が 10 kg以上増えているので、ご想像通り着物を合わせてみると 10ｃｍ近く本来重なる部分が重ならず…。当然、伊達締（着物用のひも）もギリギリの長さでしたが、そこはプロ！うまいこと締め直してくれました。帯も母の体型にうまい具合に合わせてくれて結果的にいい感じに着付けてもらえました。「プロってすごい。良かった！良かった！」母も楽しく結婚式に参加しました。

私たち姉妹と母、新郎新婦で写真を撮りました。そして「私たち偉いねー」とハグしながら喜びました。「ほんとに、えらーい⁉私たち⁉」（笑)。

そして、この機会を提供してくれた息子夫婦と、陰で支えてくれた家族に感謝をしました。

日々頑張っている保護者の皆様、今年も「自分はえらーい⁉ほんと、よくやっている⁉」とご自分を褒めてあげてくださいね（幸せホルモンのオキシトシンが出ますよ)。

そして、「ちょっと辛いな…、困ったな…」という時は、お電話でも連絡帳でも結構です。お気軽にご連絡ください。お待ちしております。

「やっと肩の荷が下りた」母と娘の話…でした。

文責橋爪